

教室型実践における異文化間能力育成

—国際バカロレアに基づいた中学校社会科での育成プロセスを事例に—

津山直樹（東京学芸大学附属国際中等教育学校/中央大学大学院）

1、本研究の目的と分析の視点

本研究では、学校の教室で実践される授業においてどのように異文化間能力を育成するかを研究課題とし、その育成プロセスを分析することで異文化間能力の育成をめざす授業実践の効果と課題を示すことを目的とする。

工藤和宏の異文化間教育学における実践的な手法の分類によると、ここで取り上げる実践は「(1)教室型の手法」であり、「(1)学習者の態度変容や能力の向上の重視」「(2)教育者と学習者の固定的な役割と関係性」という二つの傾向を持つもの（工藤、2016：104）である。このことを踏まえて「学習者の態度変容や能力の向上」プロセスを分析するために分析の視点としてナラティブ・アプローチを採用する。また、分析するナラティブは、教育者（授業実践者である筆者）がグローバル化に対応するために必要な資質・能力を学習者（生徒）に習得・活用させるために実施したパフォーマンス評価の評価対象となる課題に対しての生徒たちの成果物や振り返りコメントなどである。

野口裕二によるとナラティブ・アプローチとは「なんらかの現象を研究したり、なんらかの対象に働きかける実践をする際に、ナラティブという形式を手がかりにする」（野口、2009：18）アプローチであるという。本研究では、学習者の異文化間能力を育成するために教育者がどのように働きかけるのかを明らかにする。ここでの働きかけとは、教育者が設定する授業の目標、教育内容や授業形態の選択、パフォーマンス評価のための課題や教師と生徒の対話や生徒同士の対話など授業における実践そのものも含まれる。このように教育者の働きかけと学習者の語り直しの相互作用を分析する。

次に、パフォーマンス評価であるが、西岡加名恵によると「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような評価方法の総称」と定義しており、そのために必要なのが「様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題」である「パフォーマンス課題」であるとしている（西岡、2016：20）。また、「パフォーマンス課題」を実施する際に、ルーブリックは教育者が設定したパフォーマンス課題の意図や手順、評価の観点を示している。これを学習者に事前に提示することで、教育者の働きかけを共有できるという点で教育者と学習者の関係性に大きな影響を与える。

以上をふまえて、国際バカロレア（International Baccalaureate、以下 IB と略）認定校で、筆者が実践した社会科の授業実践を分析する。

2、IB と異文化間能力

本研究で取り上げる実践は、①学校教育の中で行われる授業という教室型実践であること、②IB のプログラムに基づいており、グローバル化に対応する資質・能力を育成する実践であることという二つの特徴がある。

「規準 A：知識と理解」「規準 B：調査」「規準 C：批判的思考」「規準 D：コミュニケーション」という「2013 年度第 1 学年基礎地理 評価規準（評価の観点）実践校バージョン」（IB の Middle Years Programme（以下 MYP と略）の Humanities（現在は Individuals and societies）のもの）と「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断・表現」「資料活用の技能」「社会的事象についての知識・理解」という「日本の中学校社会科地理的分野の観点別評価」のそれぞれの 4 観点を知識・技能・態度の三つの視点から分類し、本研

究における異文化間能力として示したのが、＜表 1＞である。本研究で取り上げる実践は、中学校社会科地理的分野における日本地理であり、年間を通してのテーマを「日本の多文化的状況を探る」に設定しており、「マジョリティとマイノリティ」や「ニューカマー」「オールドカマー」など在日の外国人に焦点を当てた学習内容を構成したため、＜表 1＞に示したような「異文化間能力」となった。

＜表 1＞IB の評価規準と社会科の観点別評価の 4 観点からみる異文化間能力

	Humanities	社会科	異文化間能力
知識	・規準 A「人文科学用語の正確性」「事実とアイデアについての詳細な知識と理解」	・社会的事象についての知識・理解「地域構成や地域的特色、地域の課題についての理解とその知識」	・日本の多文化的状況「マジョリティである日本人とマイノリティであるニューカマー・オールドカマーというカテゴリーの理解」「マイノリティについての知識」
技能	・規準 B「簡単な計画の実行」「いくつかの情報を収集、記録するために、複数の方法を正確に使用」 ・規準 C「アイデア、事象、論点または議論の要点」「多くの資料の分析」「異なる視点との識別」「情報を関連させ、妥当な意見を述べる」 ・規準 D「伝達の方法」「情報の組織立て」「出典の明示」	・社会的な思考・判断・表現「地理的事象を多面的・多角的に考察・公正に判断・適切に表現」 ・資料活用の技能「様々な資料の収集・情報の取捨選択・読み取り結果のまとめ」	・グローバル化による人の移動「日本の社会構造の変化の考察、グローバル時代における日本のこれからへの判断と自分の意見の表現」 ・マジョリティとマイノリティの現状をつかむ資料「当事者性をもたせることができる資料の比較・選択、読み取り、情報のまとめ」
態度	・探究する人「熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続ける」 ・振り返りができる人「自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所の理解」 ・規準 B「研究クエスションの選択と応答」	・社会的事象への関心・意欲・態度「地理的事象への関心を高め、意欲的に追究」「各地域の特色について認識を養おうとする」	・マジョリティの変容「日本人というカテゴリーの問い直しとそれに基づくこれからの日本人としてのあり方」 ・マイノリティの気づき「自分のアイデンティティはどのようなものかを認識するためのメタ認知」

本研究においてはこれからの異文化間教育学でますます重視される「カテゴリーの問い直し」や「自分自身のアイデンティティ認識のためのメタ認知」を「態度」とし、IB や日本の社会科と共通している点が多い「知識」「スキル」とあわせて異文化間能力とする。

3、まとめ

授業実践の分析の詳細は当日の報告にて行うが、本研究では異文化間能力を設定することで、教師が生徒の多様な側面に気づき、教師が設定した授業実践の予期していなかった新たな効果を検証できた。つまり、異文化間能力は教師と生徒の関係が固定的である教室型実践から教師と生徒の関係が固定的ではない生成的な実践へと転換させる契機になりえることを示した。

一方で、課題としては学校教育の中で異文化間能力を設定し、生徒の作品によりカテゴリーの組み替えを見取することは、どのくらい妥当性があるのかが挙げられる。この点は、生成的な実践を行う中で、異文化間能力をどのように設定すべきなのか、あるいは設定する必要があるのか（評価するかどうか）という授業実践の根本的な問題を提起している。

＜参考文献＞

- 工藤和宏（2016）「異文化間教育学の実践とその研究手法」佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健編『異文化間教育のフロンティア』明石書店
- 西岡加名恵（2016）『教科と総合学習のカリキュラム設計－パフォーマンス評価をどう活かすか－』図書文化
- 野口裕二（2009）『ナラティブ・アプローチ』勁草書房